

—巻頭言—

# 明治大学図書館の歴史

山泉 進<sup>\*</sup>

明治大学の前身である明治法律学校に図書館ができたのは1886（明治19）年12月のことである。今から130年前のことになる。その年、有楽町3丁目の旧島原藩邸に開校した明治法律学校は、南甲賀町に校地を移転し2・3階建ての新校舎を建設、その1階に「文庫」「図書閲覧室」を構えた。講師、校友、特別生に閲覧を許した。「文庫」は、もともとは「ふみ」と「くら」とから作られた和製漢語である。中世につくられた金沢北条氏の金沢文庫、足利学校の足利文庫などがよく知られているが、江戸期には各藩の大名や藩校に文庫が置かれた。明治期には三菱財閥の第2代・岩崎弥之助が始めた静嘉堂文庫、第3代岩崎久弥の東洋文庫が現在まで続いていることはご承知のことであろう。

明治法律学校は、1903（明治36）年、専門学校令により明治大学と改称した。それにともない「文庫」も「図書館」と改称、初代の図書館長に岩野新平が就任している。1906（明治39）年には校舎の増築が行われたが、それにより3階建ての最上階に「書庫」「標本室」「図書閲覧室」が置かれた。それ以前の1897（明治30）年には一般学生にも閲覧を許すようになり、図書閲覧規則を定めた。その後、1907年には講師であった亀山貞義の旧蔵書118冊、翌年には帝国教育会の書籍館所蔵のボアソナード文庫4000

<sup>\*</sup>やまいずみ・すすむ／明治大学図書館長／法学部教授

冊余り、名村泰蔵名誉講師の旧蔵書（和書 226 部・洋書 223 部）の寄贈を受けた。ボアソナードのもとで司法省法学校で学んだ創立者たちが、フランス法学を基本にして法学教育の普及をめざした明治法律学校の開校時においては、刑法と治罪法とが公布されたばかりであって憲法はじめ諸法典は整備されていなかった。講義は難解なものであった。第 1 回の卒業生 20 名のなかの 1 人である安田繁太郎は後年つぎのように回顧している、「翻訳された書物というものは乏しかつた。それで学校は兎に角ヨーロッパの新思想を持つた先生方が教えられるのでありますから総て原書を以てする。生徒は何も参考書と云ふものはなく、只講義筆記が生徒の研究するについて一番必要なものであつた」と。私立の法律学校は、司法省法学校や東京大学などの「正則」、つまり外国語での授業とは違って、日本語をもちいての授業である「変則」でおこなわれたのであるが、それでも専門書や参考書がいかに必要とされたかは想像できる。安田たちは講義を筆記し、たとえば宮城浩蔵の『刑法講義』などを刊行した。

その後の図書館の歴史は、片山昭蔵が編集した『明治大学図書館史』（1996）によってたどることができる。それによれば、現在の駿河台（小松宮邸跡）に新校舎を建設し移転したのが、創立 30 年の年、1911（明治 44）年 10 月である。正門から入って右手奥に記念館（8 号館）、その左手後方に書庫（6 号館）、その左側に木造建て（4 号館）の 2 階に図書館閲覧室が設けられた。1923（大正 12）年の関東大震災は 24 棟の全校舎を焼失させた。もちろん図書館も全焼し、ボアソナード文庫などの蔵書、原簿、目録等の一切の資料が焼失した。焼失図書数は、和漢書 41,247 冊、洋書 14,723 冊、合計で 58,970 冊であったと記録されている。復興記念館の竣工は 1928（昭和 3）年 3 月、1 階に閲覧室と図書館事務室が置かれた。さらに創立 50 周年の記念事業として新図書館の計画が決定され、1932（昭和 7）年 6 月に開館する。

日本の敗戦をはきんで、2001（平成 12）年 3 月に開館する現在の図書館にいたるまではまだ幾つかの出来事がある。創立 120 周年記念館事業として建てられたリバティタワーの完成は 1996 年 9 月、その 2 期工事として開館されたのである。ご存知のとおり、1 階から地下 3 階までの 4 層構造で地下 2 階には 100 周年記念図書館書庫への通路が確保されている。そ

の 100 周年記念図書館は、創立 100 周年の記念事業の一つとして建設されたもので、旧 9 号館跡地に、現在の駿河台研究棟（地下 3 階・地上 12 階）の地下 3 階から地上 3 階までが図書館にあてられた。竣工は 1984（昭和 59）年 3 月であった。

詮索好きのついでに言えば、本冊子『図書の譜』が創刊されたのは、1997（平成 9）年 3 月、後藤総一郎館長の時である。創刊にあたっての「「知」の創造」と題された巻頭言には、「図書の、思想の、学問の原初からたずね歩くといういわゆる書誌学的世界から、思想の根源から改めて問いなおす作業を通して、新たな「知」の創造への舞台を用意しておこうという意図で編集」と、柳田国男を軸に政治思想史研究を専攻した後藤総一郎らしい言葉が連ねられている。私は、大学院生にとき、高田馬場にあった社会人の私塾「寺小屋教室」で後藤さんと出会い、そして明治大学において改革の先導者としての姿を長年にわたってみてきた。奇しくも『図書の譜』の創刊から 20 年を経由して私が巻頭言を執筆するめぐりあわせになった。この間に、大学における図書館の役割は大きく変わってきた。教育、研究、社会連携への図書館の積極的貢献が求められていることはいうまでもないが、デジタル化やグローバル化への対応が新しい課題としてある。

「図書館は大学の心臓である」、依然としてこの言葉は古びていない。明治大学の改革は図書館 130 年の歴史とともにある。